ポスター | 1-08 電気生理学・不整脈

ポスター

アブレーション

座長:青木 寿明 (大阪府立母子保健総合医療センター)

Thu. Jul 16, 2015 4:50 PM - 5:26 PM ポスター会場 (1F オリオン A+B)

I-P-033~I-P-038

所属正式名称:青木寿明(大阪府立母子保健総合医療センター 小児循環器科)

[I-P-037]心外導管を用いた手術後の心房細動に対して下大静脈-右房間自 己組織穿刺後に経皮的カテーテル肺静脈隔離術を行った症例の検 討

○籏 義仁, 山崎 武士, 藤井 隆成, 藤本 一途, 曽我 恭司, 富田 英 (昭和大学横浜市北部病院 循環器センター) Keywords:Fontan手術, 心房細動, カテーテルアブレーション

【背景】発作性または持続性心房細動(AF) は Fontan型手術後遠隔期症例に合併する上室性頻拍の一つであ り、Fontan型手術症例の予後を悪化させる因子の一つである。近年、術後遠隔期上室性頻拍の合併率が低い心外 導管を用いた Fontan手術 (TCPC) を受ける症例が増えている。このような症例に人工血管穿刺を行い心房内リ エントリ性心拍や心房頻拍の経皮的カテーテル心筋症灼術を行ったいくつかの報告はある。しかし、複数カ テーテルを心房に挿入する必要がある AFに対する経皮的カテーテル肺静脈隔離術(PVI)の報告は少ない。【症 例1】33歳の男性。出生後に TA(Ib)と診断され、新生児期に左 BTシャント、その後に Bjork型 Fontan手術を 受けた。28歳頃から薬剤抵抗性発作性 AFがあり、 Maze手術と one and one-half repairを受けた。【症例 2】34歳の男性。出生後に TA(Ib)と診断され、2歳時に Fontan(APC)手術を受けた。28歳頃から薬剤抵抗 性発作性 AFがあり、 Maze手術と Fontan(TCPC conversion)を受けた。 【結果】2症例とも手術後に AFが再発 したため、当センターに紹介となり経皮的カテーテル肺静脈隔離を受けた。造影 CT検査でともに IVC-RA自由壁 間に穿刺可能な部位が存在しているのが確認できた。両症例とも RF Needleを用いて IVC-RA自由壁間を穿刺し て、同小穿孔にガイドワイヤを挿入して Cutting balloonを用いて穿孔を拡大して、3本のロングシースを通過さ せた。 RA経由で LA内にカテーテルを挿入して PVIと GP ablation, その後に RA mappingを行った。2例とも合 併症なく AFの根治に成功し、現在のところ洞調律を維持している。【まとめ】心外導管を用いた手術後 AFに経 皮的カテーテル PVIを行うには、肺静脈心房に複数カテーテルを留置する必要があるが、下大静脈-右房間自己組 織穿刺法を用いた経皮的カテーテル PVIは比較的安全で確実な治療オプションになりうると考える。